

編 集 後 記

最近の神経内科疾患に対する治療薬の開発には目覚ましいものがある。頭痛、てんかん、認知症、神経痛などの神経症候の改善薬にはじまり、パーキンソン病をはじめとする神経変性疾患の新治療薬、多発性硬化症・重症筋無力症などの免疫性神経疾患の疾患修飾薬（DMD）、脳梗塞の一次・二次予防としての抗凝固療法（DOAC）、抗血小板療法、さらにはライソゾーム病などの酵素補充療法など、新たな治療開発がどんどん進んでいる。中でも、免疫性神経疾患の病態の解明に伴い、疾患の再発・進行抑制に対する治療薬、DMDの開発が際立って進歩している。免疫性神経疾患の治療の歴史を振り返ると、1970年代にステロイド・パルス療法が行われはじめ、同時期より既に免疫抑制薬の開発が始まっている。1980年代に血液浄化療法（主に血漿交換療法）が行われるようになり、1990年代では免疫グロブリン静注療法（IVIg療法）が保険適用となり、2000年代になってDMDの新薬開発が進み、現在に至っている。DMDの治療開発、中でも多発性硬化症のDMD開発につい

てみると、1990年以前ではDMDは存在しないが、2000年代にインターフェロンβ注射製剤が開発され、現在の多発性硬化症の基本的治療薬（一次選択治療薬）として3種類の注射製剤が保険承認されている。2010年代になり二次選択治療薬としてフィンゴリモド、ナタリズマブの2種類の治療薬が新たに保険適用を受けている。さらに、現在進行中のBG-12、あるいは今後勧められる治験薬などを含めると、更に数多くの新治療薬が近未来の我々の手に届くことになる。我々はこれら新規治療薬の全ての特徴、使用量・使用法、選択基準、除外基準、副作用とその対策、また新薬に伴う新たな副作用、例えば、進行性多巣性白質脳症（PML）などを含め、膨大な治療薬の知識を新たに取得しなければならない。今後、新治療薬は免疫性神経疾患のみに限ったものではない。神経疾患の新たな治療薬の様々な情報を習得しなければ、最新の神経内科治療を行うことができなくなる時代が直ぐそこまで近づいている。

（野村恭一）

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 鈴木 則宏 編集副委員長 河村 満
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡
 瀧山 嘉久 坪井 義夫 西野 一三 野村 恭一 星野 晴彦
 編集委員（幹事兼任） 園生 雅弘 高尾 昌樹

〔臨床神経学〕 第56巻 第9号 平成28年9月1日発行
 編 集 者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発 行 者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 高 橋 良 輔
 印 刷 所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日 本 神 経 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>